

第三者意見書



神戸大学大学院
経済学研究科 教授
石川 雅紀

東洋製罐グループ社会・環境報告書2009は、わかりやすく、かつ、Webサイトも活用して情報量を豊富にする方向で大幅に構成を変更しています。この試みは、概ね成功しているように思われます。構成の重要な変更点は、詳細なデータ等をWebサイトで公開することとし、報告書から省いたこと、社会性報告に2008年度の倍のページを割り当て、充実させたことです。これにともない、名称も社会・環境報告書と変更されています。

昨年同様豊富な情報を表、グラフ、フローチャートを駆使して、わかりやすく表示しています。東洋製罐株式会社(以下、東洋製罐)の誕生とあゆみの図では、東洋製罐の容器包装技術に関するこれまでの貢献が示されていますが、まさに日本の容器包装技術の歴史でもあります。この図で、現在は地球環境のための進化期とされ、直近の技術開発成果が示されていますが、軽量化、省エネルギーなどの直接・間接に環境負荷を削減することが特徴の技術となっています。これにともない、東洋製罐グループの環境技術のページが新設され、グループ全体としての環境技術が紹介されています。

社会性報告の章では、ステークホルダーとのコミュニケーションに重点を置いて報告が為されており、東洋製罐グループの社会とのかかわりがわかりやすくまとめられています。ホットライン利用件数、労災データなど定量的な情報も示され今後この報告に対するフィードバックを得て、PDCAサイクルが上手く回ることを期待します。

社会性報告の扉のページに財務ハイライトとして、売上高、経常利益、従業員数、事業種別セグメント(売上高)が示されています。2007年度比で2008年度には一人当たり売上高は単体、グループともに向上していますが、従業員数の減少によるところが大きいようです。社会性報告という意味では、付加価値の推移が示されると良いと思います。

カーボンフットプリントの試行事業では、容器包装に関するデータをユーザーに提供したことが述べられています。消費財における短期のカーボンフットプリントの削減対策としては容器包装と物流対策が重要と考えられるので、容器包装のインベントリーデータは大変重要です。これまでのLCAに対する研究開発の成果による重要な社会的貢献と理解できます。

環境方針は明確に定められ、その方針に沿った活動が実績を上げていることがわかります。2008年度は2007年度実績を踏まえて、より積極的な目標に改訂したことが述べられています。2008年度報告書と比較すると、生産活動にともなうCO₂排出量と廃棄物総排出量は目標が下げられています。系統電力のCO₂排出原単位の悪化も影響があるかと思いますが、理由の説明があった方が、より深い理解が得られるでしょう。売上高に対するCO₂排出量比率を計算すると、単体、グループともにやや増加していますが、系統電力のCO₂排出原単位の増加の影響が大きく、それを除けば改善されています。

容器包装のリーディングカンパニーとして、持続可能な社会構築にますますの貢献を期待します。